様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：４０１２４
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１３２４４

研究課題名（和文）商業高校の実践的・体験的学習への教員と地域・産業界の関与について

研究課題名（英文）The Involvement of Teachers, Communities, and Businesses in Practical and Experience-Based Education at Commercial High Schools

研究代表者
高橋　秀幸（TAKAHASHI, Hideyuki）

北海道武蔵女子短期大学・その他部局等・教授

研究者番号：８０６４９３６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：　先導的に実践的・体験的学習に取り組んでいる高等学校商業科教員にインタビュー調査を行った。その結果、実践的・体験的学習は生徒に何かしらの気づきを与えるための「場」として設定していることがわかった。また、そうした指導の中で先導的教員が重視するのは、「チームワークと一体感、広がり」、「コミュニケーション力養成」、「勉強に向かう姿勢」、「自主性や自信」、「商業高校としての人づくり」などである。これらを最終的に生徒の「進路実現」につなげ、先導的教員は、「商業教育での実践的・体験的学習を通してキャリア教育を展開している」ことがみえてきた。

研究成果の概要（英文）：　Interviews among the innovative teachers at commercial high schools show that they offer practical and experience-based lessons as “places” for the students to gain some kind of awareness. In such classes, these teachers put an emphasis on “teamwork and a sense of togetherness,” “communication ability,” “attitude toward learning,” “independence and confidence,” and “character building unique to commercial high schools.” This survey makes it clear that these innovative teachers conduct career education through these classes with the final aim of helping their students to realize their future plans.

研究分野：教科教育学

キーワード：職業教育　商業高校　実践的・体験的な学習　高等学校商業教育　キャリア教育

１．研究開始当初の背景

(1)全国の商業高校では様々な実践的・体験的学習に取り組んでいる。現指導要領においても第一に「専門性の基礎・基本重視とともに体験的学習を通しての実践力育成」、第二に「地域産業や地域社会との連携・交流を通じた実践的教育と外部人材活用」、第三に「人と接し職業人としての人間性を養うこと」が示され、体験学習や実践的教育、地域連携、人との関わりなどがキーワードとしてあげられている。こうしたキーワードについて本研究では、先進事例を整理し今後の商業教育充実に向けての検討を行うこととした。

(2)申請者は修士論文「商業高校における職業教育の可能性」(2010)で商業高校について調査を始めており、「インターンシップと販売実習に関する比較研究－商業高校の在校生調査から－」（2013、インターンシップ研究年報第 16 号）で実践的・体験的学習についての調査研究を行ってきている。また 22 年間商業高校の現場で勤めてきた経験を活かし、今までの調査研究で得た知見に加え、本研究において生徒の専門性深化とキャリア形成のために効果的な周囲の関わり方を検討し、商業教育研究を進展させていく。

２．研究の目的

(1)本研究では、地元北海道をはじめ全国の先進的な商業高校の実践的・体験的学習の取り組みについて調査を進める。また、調査対象を生徒主体ではなく、優れた取り組みを率先して指導している教員の指導方法や考え方、工夫など生徒との関わり方に限定し調査を進める。さらに、そうした教員と連携している地域・産業界の方も調査対象に据え、周囲がどのように関わっていくことが生徒の専門性やキャリア形成に寄与しているのかを明らかにしていく。

(2)インターンシップやアクティブ・ラーニング、PBL などについては高等教育機関での優れた実践事例の報告や調査研究は多い。しかし、高校での調査については限定されたものしか見当たらず、調査内容についても生徒へのアンケート等から分析するものが多く、担当教員や受け入れる産業界や地域側の視点で整理されたものは見当たらない。そこで本研究は教員側と企業・地域側の双方からヒアリング調査を行い、優れた実践を行うためには生徒を取り巻く周囲（主に指導する教員）がどのように関与していけばよいかを明らかにしていく。また、優れた実践事例を整理し多くの知見を集め、それを学校間・教員間で共有していくことで商業高校の実践的・体験的学習による専門性深化という職業教育的な意義と、外部の人との関わりからキャリア教育推進としての考察も期待でき、高校教育全体においても意義深い研究になると考えている。

３．研究の方法

(1)本研究の研究対象は、先導的に実践的・体験的学習に取り組んでいる全国の商業高校教員である。ここでの「先導的に取り組んでいる高校」の選抜にあたっては、日本商業教育学会第 25 回全国大会資料で先進的に取り組んでいると紹介された高校と平成 27 年度北海道高等学校商業クラブ研究発表大会に参加し、実践的な取り組みを行っている高校から研究代表者が行った。また、本研究は平成 27 年度から 3 年間かけて調査したもので、計 22 校に筆者が直接訪問して行った。なお、調査対象高校の概要は図表１の通りで、図中の人数とはインタビュー調査時の参加者数である。

(2)インタビュー方法は半構造化インタビューとし、質問内容は「実践的・体験的取組の概要」、「指導上大切にしていること」、「実践的取組と検定指導との兼ね合い」、「今後の高校商業教育へ意見」の 4 点を中心に 60 分程度自由にお話をしていただいた。インタビュー後は、IC レコーダーで録音したデータをテキスト化し、調査対象教員が実践的・体験的学習を指導するにあたり「何を大切にしながら取り組んでいるのか」に着目し、類似例を集めながらいくつかの頻出キーワードを抽出した。そして、そのキーワードごとに分析を進めることにした。

図表１：調査対象校の概要

校名	地区	実践概要	人数
A高校	北海道	地域連携、商品開発	1
B高校	九州	学校デパート、模擬株式会社	2
C高校	北海道	地域連携、調査研究	1
D高校	近畿	地域連携、調査研究	3
E高校	関東	商品開発、模擬株式会社	1
F高校	関東	地域連携、インターンシップ	1
G高校	中部	観光、海外、商品開発	3
H高校	中部	地域連携、模擬株式会社	3
I高校	近畿	地域連携、調査研究	2
J高校	九州	学校デパート	3
K高校	九州	電子商取引、起業家教育	3
L高校	九州	学校デパート、インターンシップ	2
M高校	中部	株式会社経営、起業教育	2
N高校	中部	模擬株式会社、商品開発	3
O高校	四国	地域連携、商品開発、海外研修	1
P高校	近畿	地域連携、貿易	1
Q高校	北海道	商品開発、調査研究	1
R高校	北海道	地域連携、商品開発	1
S高校	中国	学校デパート	1
T高校	東北	地域連携、オリジナル教材	3
U高校	東北	地域連携、商品開発、調査研究	2
V高校	中部	学校デパート	1

４．研究成果

(1)先導的な教員は実践的・体験的学習を肯

定的にとらえていることはもちろん、そうした学びを、生徒自ら何かにが気づくための「場」として設定している。この点については、鹿毛（2013）が 、「教師とは学習者の学びを促進するために、学習者自身が学びたいと思えるような教育の場の創造を仕事とする専門職であり、見識と経験に裏打ちされた身体化された態度と技によって、一度きりしかない実践を臨機応変に学習者たちとともに創り出す、困難であるが極めて意義深い仕事といえるだろう」とし、教師の役割のひとつとしてあげている。それではまず「場づくり」についての発話例をみていく。なお、発話例は斜体で示しており、先頭のアルファベットは図表１の調査対象校名と対応している。また、発話中のカッコは文脈が理解しやすいよう筆者が書き足したものである。

G高校：「何を体験させるのかっていうのを考えるのが我々の仕事で、どう導いてやるのかが大切になる」
B高校：「実践の中で生徒の成長を見れるのが楽しい。でも生徒を動かしていくって実際大変じゃないですか。だけどそれ以上に生徒がすごく成長していってくれるので、（こうした実践的な取組に携わるのは）教師冥利に尽きるなっていうところですね」
K高校：「基本的にはですね、（実践的な取組は）やはり生徒が外に出ていくための、ツールとしてということです」
Q高校：「商業で勉強している内容を最終的に販売会に活かしていくもの。仕入れや販売もそうだし、（接客での）コミュニケーションもそうだし、いろんな作業での情報処理もそうだし、いろんな（商業での学びの）要素が集まっているものだと思います」

こうした「場づくり」を前提に次からは、先導的教員は具体的に「何を大切にしながら取り組んでいるのか」「何を生徒に気づかせようとしているのか」についてみていくことにする。実践的・体験的学習は、生徒に「何か」を気づかせる場であり、そうした場を創るために実践されているとした場合、その「何か」とは具体的にどのようなものだろうか。まず、ヒアリング調査から見えてきたことは、教員によりあるいは学校により、その「何か」が異なるということである。そして、その生徒に気づかせたい、あるいは学ばせたい「何か」を明確に目標設定してから実践している点が共通している。つまり、実践的・体験的学習を通して教員は育成する資質・能力が明確ということである。生徒が身に付ける具体的目標を設定し、何のために実践的・体験的学習を行うのかを生徒にしっかりと伝えてから取り組んでいる。伝統的な行事だからただ何となく取り組んでいるという意識ではない。

ここで生徒に気づかせたい、学ばせたいその「何か」については、インタビューの発話内容から類似例を集め、複数の教員が大切にしている項目に注目し、図表２で示した５つのキーワードに絞り込み、それらを抽出した根拠となる発話例を示しながら、あわせて考察を述べていく。先導的な教員は、ここで示したいくつかのキーワードを大切にしながら指導し、共に実践しながら、生徒に気づきを与え、最終的には一人ひとりの進路実現につなげるという流れを大切に取り組んでいる。それでは発話例を示しながら各キーワードについてみていく。

チームワークと一体感、広がり
コミュニケーション（話す聴く読む書く）
授業、勉強（検定取得含む）
自主性と自信
人材づくり

図表２　抽出したキーワード

(2)チームワークと一体感、広がり

一つ目は「チームワークと一体感、広がり」である。実践的・体験的学習を通して生徒間におけるチームワーク醸成を大切にしている。このチームワークについては、髙橋（2013）において商業高校の在校生調査から販売実習には、チームワーク醸成効果があることをアンケート調査から明らかにしている。また、チームワークのみならず、教職員間の一体感や部活動等での先駆的な取組を学校全体のものへと広げるように心がけている。いわば「点から線へ、線から面へ」というようなイメージで広がりがもてるような取り組みを意識している。以下はチームワークと一体感、広がりに関する発話例である。

J高校：「本当に実践が必要だと思うんですけれども、みんなで力を合わせて何かをやり遂げる、それもビジネスでですね一人ではなかなかできないことも、皆で力を合わせることで、成し遂げられるんだよっていうのがやっぱり、こういう学校デパートで学んで欲しいと思ってます」（生徒間のチームワーク）
V高校：「本当に（学校デパートの）全体像が分かってないので、生徒に引継書をちゃんと作らせるようにはしてる」（他学年との連携）
K高校：「（実践的な取組は）一緒に生徒を育てながらですね、教職員がチームとなって、楽しくやっていけるような雰囲気の中でやってます」（教職員の一体感）

このように「チームワークと一体感、広がり」を大切にしながら指導していることがわかる。さらに、先導的な教員には実践的な取り組みを行う実行力に加えて、社会人基礎力で示されている「働きかけ力」も持ちあせており、生徒や他の教員、学校全体を巻き込みながら実践してくことを意識している。

(3)コミュニケーション（話す聴く読む書く）

二つ目は「コミュニケーション、いわゆる

話す、聴く、読む、書くという四技能」を大切にしている点である。こうしたコミュニケーションの基本を常に意識し、具体的に話す、聴く、読む、書くという取り組みを大切にしている。さらにコミュニケーションに関しては、自分たちから周囲と積極的に関わっていく姿勢、いわゆる「自主的な姿勢」に加え、企業や地域の方から自分たちに優先的に声をかけてもらえるようないわゆる「人間性や人柄づくり」も意識している。こうしたことが地域や企業と連携した実践的な取組の成功要因となっているのではないだろうか。コミュニケーションに関する発話例は、次の通りである。

H高校：「ものづくりの工業（高校）と違うので、人と人をつないだり、点と点、物と物をつないだりっていうことでもコミュニケーションは欠かせないものだから、そこを大事にしながらっていうのを、うちで実践しながら学んでいけたらいいと思う」（つなぐ役割）
Ｉ高校：「チームでやることがどうしても多いので、コミュニケーション力と協働という部分ですね、押したり引いたりしながら皆で作っていくっていうそういうコミュニケーション力が身につきますね」
Ｓ高校：「実際にアポを取って店長さんとかですね、出かけますので、そういった大人との折衝ができるというのはやはり実社会に近い体験ができる、そういったところが一番の学びではないかなと思いますね。」（話す力）
G高校：「ガイド役でいうと最初は人（現役ガイド）から話を聞くっていうことですよね。それは自分がガイドをするっていう前提で、自分がそのガイドの原稿を作らなきゃいけないということなので、聞く姿勢も必死に聞くということで、まずきちんと人の話が聞けることが大切」（傾聴力）

このように話す、聴く、読む、書くという基本的なコミュニケーションを意識しながら、プレゼンテーション力や教科商業として大切なモノを売る力いわゆる、「ビジネスコミュニケーション力」を身に付けさせることを意識している。また、卒業後の人間関係を見据えた上で様々な外部の方と積極的に関わる工夫などもみられる。そして何より先導的な教員自身が、こうしたコミュニケーションスキルが高いとインタビュー調査を通じて感じた。指導する教員の資質も、実践的・体験的学習を先導的に行い、効果をあげる要因のひとつといえる。

(4)授業、勉強（検定取得含む）

三つ目には「授業、勉強」を大切にする点である。もちろんこれには高校商業教育における検定取得への取り組みも含まれている。実践的な学びにつなげていくためにも、普段の授業を大切にして勉強をしっかりさせている。また、実践や体験のみを重視するのではなく、周囲から期待される検定取得においても成果をあげている。

この実践的な取組と検定取得を両輪として指導することに関しては２つの方向がみられた。一つは「授業・検定の学びからから実践へつなぐ」形であり、二つ目は「実践的な学びから授業・検定へつなぐ」形である。当初、筆者も実践的・体験的学習は、授業での学びを社会の中で実践し、そこでできる事とかできない事を生徒が確認（気づき）し、できる事についてはさらに上位へ進み、できない事はもう一度学ぶ（復習）と考えていた。しかし、先導的教員は、授業や検定の確認としての意味に加え、実践を通して次なる学びへつなげることも意識していることがわかった。彼らは、実践的な学びをその後の検定や勉強に生徒を向かわせるためのツールとして設計している。また、ある高校では目標とする検定検定の基本レベルの設定が高く、日商簿記検定２級を全員で目指していた。こうした高い目標を掲げて取り組む学校や教員の姿勢が検定取得はもちろん実践的・体験的学習における成果にも現れてくるのではないだろうか。以下は、授業、勉強に関する発話例である。

R高校：「簿記にしても、計算にしてもマーケティングにしても、情報処理にしても、やっぱり基礎的なものは絶対になくならないと思うので、商業高校の勉強としては、大事にしなきゃいけないもの」（基礎・基本の重視）
Ｉ高校：「こういうこと（実践的な取組）をしていこうと思ったら、その背景に簿記会計のことであるとか、コンピューターのリテラシーであるとか、そういう部分をしっかり身につけていないと難しいので、そういう意味では、（実践的な学びで）産業界に出て行った時に役立つスキル、それも身につけてることにつながっているかなというふうに思います」（授業と実践を両輪で展開）
L高校：「１つ１つの授業は部品みたいなもので、この実践でその部品を組み立てて１つの集大成として完成させるようなイメージで実践に取り組んでいる」（授業から実践へ）

このように「授業、勉強そして検定取得」を大切に指導していることがわかる。実践的・体験的学習を有効なものとするためには、普段の授業による勉強が欠かせないのである。また、地域からの期待に応えていくために検定取得でも一定の成果をあげるように努めている。

さらに、実践的な取り組みと検定講習などで時間が足りない場面においても、生徒側の必要なものあるいは目指すものに絞り込んで、時間を有効に使うための工夫がみられる。ただ取得数だけを競い合うような目標設定

はしていない。また、きちんとした授業展開で講習や補習ありきの指導体制から脱却している。どのような場面でも時間を有効に使うための工夫を先導的教員自身が実践し、生徒にもこうした視点を持たせるように心がけている。

(5)自主性と自信

四つ目は生徒の「自主性と自信」を大切にしている。前述の時間の有効利用ともつながるが、生徒自身がその必要性を考えて自分で判断して行動できるように工夫している。商業高校生が学力に関して入学時点で自信を失っていることもあり、検定取得や実践的な取組の中で自信を持たせるように意識して指導している。こうした自主性と自信の二つを持たせることを大切にし、積極的に生徒へ声かけるなど上手に働きかけを行っている。以下は、自主性と自信に関する発話例である。

G高校：「宿題っていわれたからするんじゃなくて、自分が分からないから勉強するみたいな、そういう自分で考える人になってほしい。そこで、こういう検定を取りたいから勉強しなきゃとか、先生には補習をしてもらうのが当たり前じゃなくて、分からないところを自分から聞きに行くぐらいの、そういうエネルギーのある生徒がいいなと思ってます」（生徒への意識付け）
D高校：「自分で考える力であるとか、自主的に何事にも取り組むという姿勢ができていれば、検定は、自分で取り組んで自分で問題集やったら、それぐらいとおるでしょうというふうなスタンスです」（学校全体の姿勢）
E高校：「学校の中でちゃんとしなさいとかっていってもピンとこないところを、外でやることによって、やっぱりちゃんとしなきゃなんないだと（生徒が）気づくことができる。自分から率先してできるようになるっていうのが外に出ることの良さというんですか」

こうした自主性や自信を持たせるための働きかけを含め実践的・体験的学習においては、すべてが計画的に予定取りに進むわけではない。実践を通した様々な体験の中で偶然、生徒が気づいたり学んだりすることも多い。

先導的な教員は、自主性や自信を生徒に身に付けさせるため、あるは進路を考えていくための偶然（チャンス）をつくりだすものとして実践的・体験的学習を活用しているようにみえる。実践を通して「新しいことに挑戦させること」、「プロジェクトに参加させること」は、生徒が望ましい出来事に出会うための「場づくり」になっており、学びへの気づきや進路実現にもつながっているのではないだろうか。

(6)人材づくりから進路実現へ

五つ目は古くから言われていることだが、高校商業教育にける「人材づくり」という点である。地域が期待する人材を育成するという視点はもちろん、生徒が目指す進路実現を見据えての人材づくりを意識している。しかし、ここには高校商業教育における統一した人材像があるわけではなく、期待する人材は地域、学校、教員により差異があり、生徒一人ひとりへの指導が異なることはいうまでもない。さらに、人材づくり、人材育成という観点で見れば、先導的な教員自身も含めた教員の育成についても同様な点がある。本調査の中で、急な人事異動などから実践的な取組の引継ぎがうまくいかずに停滞したり、中止したという事例まであった。せっかくの実践的な取組をなくさないためには指導者をつくるという面での人材づくりも忘れてはならない。以下は人材づくりに関する発話例である。

L高校：「普通高校ではいわれないけど、やっぱり向こう側にはお客さまがいるんだぞっていうのを指導していかなければいけないのかな、そういう（ことが意識できる）人材づくりですね、それが商業教育の基本なのかなと考えています」（顧客の視点に立てる人材）
B高校：「お客様にいらっしゃいませ、ありがとうございましたっていうだけではなく、心のこもったしっかりした挨拶とか、おもてなしの心遣いができれば、（販売会等と）違う場面でも商品を買ってもらえる。そういうことができる人を育てたい」（ものを売れる人材））
N高校：「もっと企業にどういった子が欲しいのか、どういった商業生を求めているのかっていうのをもっと聞いて、関係を深めていくことが凄く大事だと思いますよ。やっぱり社会に求められてないことをいくらこれが大事なんだって言っても駄目だと思うので」（求められる人材の研究と輩出）

このようにそれぞれが目標とする人材像は様々だが、先導的な教員は、実践的・体験的学習はもちろん商業教育で可能なことを総動員して人づくりに励んでいる。そして、最終的には生徒の希望する進路実現に向けて指導をしていくのである。以下は進路実現に関する発話例である。

K高校：「本当に商業を担う子を育てようと思ったら、商業にものすごく興味を持たせて、もう１つ上のランクで勉強させるしかないのかなという気持ちがあります。企業に入って、そこで従事する者であれば商業高校（の指導内容）だけで充分なのかなって思うんですけど、そうじゃなくて経営者っていうのであれば、やはり大学まで興味関心を持たせるような生徒を育てるのが我々の仕事ではないかと考えている」（進学への考え方）
J高校：「実社会で活躍されている企業の方から、ぜひうちに来てくれといわれるような、

そういう財産となる人材ですよね、そういう人材をつくって、日本とか世界を支えていけるような、そういう人材づくりができたら一番理想的だと思う」（就職への考え方）
M高校：「やっぱりビジネスが面白いと思って大学に行けば、もうちょっと何かやってくれるんだろうなっていうですね。そういう学校にしたいですね。もうちょっとみんなで儲かりますかって考えられるような学校にしたい」（ビジネスのおもしろさを知って進学）

商業高校を卒業していく生徒の進路は進学、就職という選択肢がある。そうした一人ひとりに対応した進路実現を大切にしながら先導的な教員は実践的・体験的学習をはじめとする様々な取り組みから「場」づくりを行っている。

(7)本研究において全国の商業高校で実践的・体験的学習において先導的に取り組んでいる先生から貴重なお話を伺うことができた。そこで語られた内容は、非常に参考になるものが多く、示唆に富んだものであり、筆者もたくさんのことを学ぶことができた。本論では多くの先生が取り上げたキーワードを 5 つに整理した。今後は、さらにデータを精緻に分析し「先導的な教員の指導のモデル化」へと進めていきたい。

＜引用文献＞

① 鹿毛雅治、『学習意欲の理論−動機付けの教育心理学』、金子書房、2013
② 髙橋秀幸、「インターンシップと販売実習に関する比較研究−商業高校の在校生調査から−」、『インターンシップ研究年報』、第 16 号、日本インターンシップ学会、2013
③ 西村修一、「商業教育に魅力はあるか」、『日本商業教育学会第 25 回全国大会資料』、2014
④ 北海道高等学校長協会商業部会、「平成 27 年度（第 51 回）北海道高等学校商業クラブ研究発表大会研究報告書」、2015
⑤ 文部科学省 、『高等学校学習指導要領解説商業編』、実教出版、2010
⑥ 文部科学省、『高等学校学習指導要領解説総則編』、東山書房、2010

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 髙橋秀幸、『商業教育論集』、日本商業教育学会誌、査読無、第 28 号、2018、103-110

〔学会発表〕（計２件）

① 髙橋秀幸、「高等学校商業教育における実践的・体験的学習−先導的な取組に向けての教員の考え方−」、日本インターンシップ学会、2016
② 髙橋秀幸、「実践的・体験的学習における先導的取り組みへの指導−教員は何を大切にしながら取り組んでいるのか−」、日本商業教育学会、2017

６．研究組織
(1)研究代表者
髙橋　秀幸（TAKAHASHI, Hideyuki）
北海道武蔵女子短期大学・教養学科・教授
研究者番号：８０６４９３６９